

シンポジウム | 特別講演

歯科衛生士シンポジウム

歯科衛生士が知っておきたい多職種連携のための Up to Date

座長:小原 由紀(東京医科歯科大学大学院口腔健康教育学分野)、須田 牧夫(日本歯科大学口腔リハビリテーション科)

Sat. Jun 23, 2018 2:40 PM - 4:00 PM 第2会場 (1F 小ホール)

【小原 由紀先生略歴】

1998年 東京医科歯科大学歯学部附属歯科衛生士学校卒業

1998～2010年 開業歯科医院勤務

2008年 東京医科歯科大学歯学部口腔保健学科卒業

2010年 首都大学東京大学院修了・修士(健康科学)

2014年 東京医科歯科大学大学院修了・博士(歯学)

2014年～ 東京医科歯科大学講師, 東京都健康長寿医療センター非常勤研究員(～現在)

日本歯科衛生士会認定歯科衛生士(老年歯科)

日本歯科衛生士会理事

所属学会: 日本老年医学会, 日本摂食嚥下リハビリテーション学会, 日本歯科医学教育学会, 日本歯周病学会, 日本口腔衛生学会

【須田 牧夫先生略歴】

1996年3月 日本歯科大学歯学部卒業

1996年4月 日本歯科大学歯学部附属病院臨床研修歯科医師

1997年3月 同 修了

1997年4月 同 高齢者歯科診療科臨床研究生医員

2001年1月 同 総合診療科

2001年10月 同 口腔介護・リハビリテーションセンター併任

2003年4月 同 総合診療科助手

2007年4月 同 総合診療科講師

2011年4月 同 口腔リハビリテーションセンターセンター長

2014年4月 同 口腔リハビリテーション科講師

口腔リハビリテーション多摩クリニック 院長代理

2015年4月 同 医長

2018年4月 日本歯科大学口腔リハビリテーション科臨床講師

現在に至る

【抄録】

超高齢社会が進む中、高齢者への食支援は今後ますますニーズが増していくと考えられます。歯科衛生士は、口腔衛生管理・口腔機能管理の観点から食支援に関わることとなりますが、支援の質を向上させるためには、課題を明確化するため情報と目指すべきゴールを多職種と共有する必要があります。しかしながら、多職種連携は「言うは易く行うは難し」で、現場ではさまざまな課題に直面することとなります。

今回、それぞれの職種の知識の基盤や視点をよく知ることが連携を円滑にする第一歩と考え、本シンポジウムを企画しました。草間里織先生の歯科衛生士からの問題提起に続き、看護師の柴崎美紀先生、言語聴覚士の石山寿子先生、管理栄養士の本川佳子先生より、それぞれの視点から食支援の実践のために把握しておくべき知識や連携のあり方について提言をいただきます。皆さんと最新情報へのアップデートと活発なディスカッションをしていきたいと思っております。

[S10-2]地域一体型 NSTで活躍が期待される歯科衛生士へ看護師として伝えたいこと

○柴崎 美紀¹ (1. 杏林大学保健学部看護学科)

【略歴】

1994年 東京医科歯科大学医学部保健衛生学科看護学専攻卒業（看護師，保健師）

2002年 琉球大学大学院保健学研究科修士課程修了

2015年 東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科博士後期課程単位取得満期退学

大学卒業後，総合病院の看護師として勤務後，国保連合会，在宅療養支援診療所，夜間対応型訪問看護介護等の在宅医療関連機関に勤務

2008年 順天堂大学医療看護学部地域看護学教室助教

2012～2014年 医療法人社団つくし会新田クリニック在宅医療連携拠点事業

2014年～ 杏林大学保健学部看護学科在宅看護学教室講師

日本静脈経腸栄養学会学術評議員，日本公衆衛生学会，日本在宅ケア学会，日本在宅看護学会，日本看護科学学会，日本摂食嚥下リハビリテーション学会

演者は地域での栄養サポートチームの実践活動に参加するなかで，栄養状態のみならず褥瘡や感染症などの合併症が劇的に改善するなどの効果を経験した。特に顕著な効果があったのは，歯科衛生士による適切な口腔ケアであり，繰り返す誤嚥性肺炎から回復した事例である。このような経験を通して，歯科専門職を含めたチームアプローチの必要性を認識している。看護師の立場および在宅医療の視点から，歯科衛生士へ向けての要望は，多職種協働の必要性，口腔内だけでなく全身を診る必要性，在宅医療の魅力への理解，である。今回の日本老年歯科医学会における歯科衛生士シンポジウムでは，地域一体型 NSTの構築に向けて，歯科衛生士や多職種と看護師の協働で担うべき役割の詳細を，実践経験からの実例や私見と，研究活動で得た知見を合わせて論じたい。また登壇者や参加者との討論の機会を得て，今後の展望についての議論を深めたい。